

『きけわだつみのこえ』は大学出の兵士の遺言を編集したのに対し、『戦没農民兵の手紙』は一般農民兵士が書き遺した手紙を編集している。半藤一利氏著『戦士の遺言』は、超エリート軍人の遺書と、当時の戦況を伝えている。戦士らは優秀で、誠実な人たちだから、戦争のない時代に生きていたら、さぞ、社会に貢献しただろうと思う。一般兵士に関しては、大著『世紀の遺書』に獄死、死刑になった人々の最期の言葉が遺されている。私は、戦争に行けなかった障害者たちは、どうだったのだろうかと思っていたところ、岩波の『世界』の書評に、林雅行氏の『障害者たちの太平洋戦争 狩りたてる・切りすてる・つくりだす』が掲載されていたので、早速、買って読んでみた。林氏は、障害者について、歴史的に克明に調べ、彼らの置かれた過酷な状況を具体的に報告している。

近代戦争は国家総動員の戦争である。従って、兵隊になれない障害者は「日本国民に非ざる者」「穀潰し」と言われ、「兵隊になれない者が大きな顔をするな。馬や犬でも軍馬や軍用犬になれるのに」と、馬、犬以下の者とされた。それゆえに、障害者たち本人は、国に対して戦争に貢献できると訴え、懸命に働いている。その裏側では、戦争に役立たない者の命は保障されず、無残に捨てられている。

第一部は「戦争は障害者を選別する」というタイトルである。盲人は耳が鋭敏だから、敵機の音を聞き分ける防空監視哨となり、針灸マッサージをする人は、戦地や艦船で、技療手として、軍人たちの体をもみほぐす仕事に従事した。聾啞者は、耳が聞こえず、物が言えないが、体は頑強なので、応徴された産業戦士として戦争に狩りだされた。「聾啞戦士の歌」で「えゝ耳は聞えね この腕で 興亜の火花 咲かそうぜ」と威勢よく歌っている。彼らは「非国民」という汚名を返上しようと、戦争遂行策にまっしぐらに従っている。

本土が空襲されるようになって、学童疎開が行われた。これは、将来、兵隊になる子どもを守り、育てるための手段であった。この時、障害を持つ子どもたちは、集団生活に不適格とされ、疎開から外された。東京都長官は「帝都の学童疎開は…将来の国防力の培養でありまして学童の戦闘配置をしめすものであります」と、将来の戦闘にふさわしくない、適さない子どもの命は捨てても構わないということであった。

知的障害者も、兵役から排除された。知的障害者に収容施設や教育施設が作られていった。障害者の教育にはキリスト者の働きが大きい。林氏は、その中の一つ、伊豆大島の藤倉学園の悲劇を報告している。米軍が日本に接近して来た時、防衛陣地を大島に求めた。大島の藤倉学園に退去の依頼（命令）があり、何の補償もなく、移転せざるを得なかった。苦労の末、立教学院の所有する清里寮の原野を借り受けて、移住した。丸太小屋のような建物で、知的障害者たちの生活が始まったが、寒さと飢えで、彼らの若い命は次々に奪われていった。戦争が、障害者たちの命を見捨てたのである。

第二部は、「戦争は障害者を生みだす—ある戦災被害者の歩んだ道」と題した、名古屋空襲で左目を失った杉山千佐子さんの生涯を伝えている。彼女は、民間人の戦争被害への補償を求める運動を牽引してきた。強烈な主張をし、行動を起こした人生は見事である。

軍人として戦場に行き、戦死する、戦争責任を問われて死刑になる、また、責任を感じて自害する。悲しい死である。戦争に行けない障害者たちは国から不要、邪魔者とされ、肩身が狭く、居場所を無くした。障害の苦しみの上に、更なる苦悩を背負わされた。本書を読んで、非国民と言われないように、身を粉にして働いた障害者の思いには、深い同情を寄せる。いずれにしても、戦争だけは決して起こしてはならないということである。